
空の記憶

紅碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の記憶

【Nコード】

N8268Y

【作者名】

紅碧

【あらすじ】

火星のエスパー訓練校小等部の天使族のシルバーは、トラブルを起こしたため、中等部から、シェイラ研究所協の訓練校Zコースに編入することになる。友人バラードの心中は穏やかではない。

3082年 秋

銀杏並木が金色に染められ、校庭が様々な落ち葉で美しく彩られる頃。

放課後。

軽音楽部室Ⅱ音楽室でピアノを弾いていた時のことだった。

「おい、あいつ囲まれたぜ」

脇でドラムをたたいていた同じ部活のジョイがささやく。

「ん？」

校庭の片隅に10対1の形で円陣を組んでいる。6年生が中等部に囲まれている。これはどう見てもヘンだ。

それにしても、あの銀髪。気の強そうなチビだなあ。

10対1なのだが。それも、不良と呼ばれるたぐいの類で、皆、ガラの悪いエスパーたちだ。退学スレスレのやつから、屈折して成績はやたらいいくせに、なぜか素行の悪いやつ（俺はそのたぐいだ）もいる。かまいたちの術をつかう輩もいるというのに。

一歩も退かず、睨みつけているその眼が。

もえあがるような、みどりいろで、なんだか、とても綺麗だった。

バラードは背まで伸びた長い空色の髪を振り払い、校庭に一気に飛びおりた。

「おい、バラード、ここは4階！」

知るもんか。俺は天使族。あのチビと同じ。はぐれ者なんだ。

ひらりとそこらびもせずに着地すると、彼は青い髪をなびかせ、現場に走った。

「なんだよ、上級生のくせして、卑怯だぞ！」

同じクラスの級友として、だまっていられない。なぜなら、俺様はクラス委員長だからだ。

だが、でかい杉の木をバックにして、中坊たちを目の前に、銀色の髪の天使族の子供は、同じ12才のバラードをふりかえった。

「来るなよ。じゃまだから」

ヒヤリとするその冷たい声に、バラードは憤怒し、「なんだと？」
と言いつ返す、「怪我するよ、だって君、ブレスレットしてないから」と困ったような微笑を口元に浮かべた。

「ブレスレット」

「うん。能力封じの。こういうやつ」と、銀髪の彼、シルバーはバラードに、ささやきブレスレットをはずすと手渡した。

「ちよつとだけ、もつて。人間は傷付けないようにシールドはるから、大丈夫だと思う」

プラチナ製でエメラルドがまんなかにはめてある。

「おまえらなんだよ」

上級生の中のボスらしき少年が、シルバーの胸ぐらをつかんだ。

「ともだちです。同じクラスの。暴力反対」

「ともだちだ？ おまえら天使族にともだちなんかいるわけないだろう？ おまえ、ジュニアに囲われてるんだってな。あいつのなんだよ、ペットかよ」

ゲラゲラわらいながら、彼らは近づいて来る。

「おまえたち2人なんかカンタンに引き裂くことも俺たちはできるんだぜ。手も使わずに」

不条理とか理不尽とかいうことばをまだ幼い2人は知らなかった。だが、理解できない悪意を感じ、どう対処していいのか、特にバラードは迷っていた。いきおいこんできたにもかかわらず、だ。

「ペットって？ 僕は人間だよ」

「おまえ、天使族だろ？ 実験体に人間の価値なんかあるのかよ」
その言葉をきいた瞬間、轟音とともに、バラードは後ろ側にあった体育館と脇の訓練施設が破壊され、無数の塊となり飛び散るのを目の当たりにし、「おい。危ない」とシルバーを振り返った。

上級生たちは呆然としてたちつくしている。シールド内にいるため、

バラード含めて11人は無事だ。たぶん体育館も訓練施設も放課後だから、人はいない。建物の損壊被害を除いて。全員無事だ。

いや、ちがった。

シルバー1人だけ、校庭の草原の中倒れていた。

「おい、しっかりしろ！おい」

（彼をよんでください。ともだちだったら）

「おい。ともだちって、俺？」

（だって助けに来てくれたでしょ。僕を。だから、ともだち。彼を、ジュニアをよんでください。早く）

もしかして。とバラードは少年の鼓動が途絶えてかけているのに気付き、手に持つブレスレットのエメラルドを押し、叫んだ。

「太陽系連邦のハイト司令を、、お願いします。早く。シルバーが倒れました！」

バリエー内なので、訓練所の教官たちは気付かない。こいつ、こういう状態でなぜバリエー張ってられるんだ。

炎はいつのまにか消えていた。訓練施設1つと体育館が一瞬で吹き飛んだ。

こいつ、サイコブラスターだったのか。だから能力封じのブレスレットいつもはずさなかったんだ。

ブレスレットにつけられたエメラルドの奥を覗くと、1人のとても整った顔の青年の写真がある。その黒髪と瑠璃の双眸はときおり見かけるあの人のものだった。

ジュニアだ。

バラードはそのとき、頭上から黒い宇宙船が降り立つのに気付いた。テレポートして現れたその美しい人影は、シルバーを抱きかかえると宇宙船内へと消えた。

以後、「その個体」への監視体制はjさらに強化され、能力封じのブレスレットは真に危険な状態を察知するまで、外れないものに変えられることとなった。

一週間後。ひさびさに、金髪イケメンの執事に、送迎用高速小型宇宙船で登校してきた銀髪の美少年に、隣の席の俺はくどいてみた。
「こんどいっしょにバンドやらない？いい声してるから、ボーカルやってみて」

「バンドって、軽音の？いいけど」

にっこり笑うと、エメラルドグリーンの大きな瞳が煌めいてとても綺麗だった。

3083年 春

明日から春休みに入るといふ、終了式の日のことだった。
桃の花の甘い薫りが校庭を風になってよぎっていく。

「Zコースに編入するんだって？」

「うん。中等部から。4月1日からはZのあるシェイラ研究所に通うことになる」

「Zつつたら、エリートコースだろう？軍と直属の」

「特待生制度の授業料免除が受けられるし、担任の先生にどうつてすすめられたから」

「ジュニア、、保護者のジュノア殿はどう言ってるの？」

「いいって言ってる。うちさ、主席に勘当されてるせいで、お金持ちってわけじゃないんだ。国家公務員とはいえっても調査局の給料は中流だし。実験体の僕を養うだけでも負担かけてるし」

「サイボーグ犬の執事や家政婦のロボットを雇ってるじゃないか」

「あれは主席が監視用に一時的に置いてあるだけで、僕たちの物ってわけじゃないらしい」

「僕たち？」

バラードはセルリアンブルーの淡い青の双眸を曇らせた。

僕、ならわかるが、僕たち、とは、ジュニアとこいつがまるで、ペアみたいな言い方じゃないか。

「?からZに飛び級くらいならわかるが、RからいきなりZとは、普通おかしいと思われないか?」

「ブレスレットはずさなければ、コントロールきくから、期末は全部満点だったんだよ。特にレポートとテレパシー、あとコントロールテレキネシスははずさなかったし」

「対船用シミュレーションテストは?」

「30点」

「じゃあ、普通は無理な、はずだよな。疑問もたないか?普通」

「僕が、他の学生にこれ以上危害を加える前に、トラブルを避けるために、Zコースに隔離するんだと思う。それにZ内ではトラブルをここよりも厳しく管理して禁じられているらしいし」

12歳の子供とは思えない答えを、さらっと言ってのける彼に、バードは背筋が寒くなるのを感じた。そんな普通じゃないところ行って、恐ろしくはないのか? あそこそれも1人で。

「おまえ、怖くないのか? Zは、人殺しする以外は頭がないエリートたちの塊だ」

「うん。僕は、戦う軍にはむいてないから、将来は軍でも戦闘関係の方じゃなくて、調査局の方に就職したい。戦闘シミュレーションダメだから、きっとそっちには回されないと思う」

「だが、大変なとこだぞ、Z、、あそこは。俺は今? コースだが、来年はがんばってZに飛び級試験受けて必ず受かって、そしておまえを守ってやる」

「守る? 何から? それに怖くなんかないよ。これ以上、物を破壊する力も封じこめてるし、あっちにいてもう少しコントロールできるようにになりたいし」

「なんのために?」

「彼の役にたきたい」

「ジュニア殿のためか?」

「うん」

「好きなのか?」

「うん、この世で一番好き」

シルバーは学生鞆に授業使った教材やらノートやらをしまい、「じゃあ、もうすぐ、レオンが迎えに来るから、またね」とバラードに挨拶するやいなや、

「おい、待てよ」

とぐいと、右肩を引き戻される。

「おまえ、親友の俺になんか言うことないのか？」

シルバーの緑色の瞳が一瞬、燃え上がるように煌めいた。

「親友？」

「一番、親しいダチのことだよ。おまえ、本音で言える友達、おれしかないだろ？」

同じ天使族として、だけではない。バラードは心からこの天然ボケの小柄な天使を気に入っていた。こいつが望むなら、男でも女でもどちらになってもいいとまで、バラードは12歳ながらも、真剣に考えてまでいたのだ。

「うーん」

シルバーは少し考えた後、「、、、かもしれない。あんま、深く考えたことなかった。ごめん」とバラードに向かい、「バラードのことは親友だ」とあっさり言っただけのける。

そして、「親友っていうもの、はじめて出会ったと思う。いままでも知らなかったから。Zにいつても忘れない。ほんとにありがとう」と「連絡するね、ホログラムで」と手を振って、4階の窓からヒラリと飛び降りた。

あっけにとられるとはこのことかもしれない。

面食らったバラードは、これはひとり相撲だったかなと一瞬悩むが、あいつ、やっぱり一人にはしておけない、と心に誓うのだった。

校庭に咲く、桃の木々たちの咲き乱れるピンクの花弁が、霞かかった風に舞い、薄い紅色に彩っていく。やさしい薫りが目の前を通り過ぎて行くのだった

3084年 夏

夕方の趣味の芝刈りを終え、部屋に入るやいなや、青年は14歳になった天使族の子供に、「シルバー、そこにかけて」と、ダイニングテーブルを指差した。

「はい」

おとなしく椅子に腰かけた少年に、男―29歳のブラック・ハイト氏はストライプのスポーツタオルで汗を拭きながら、家政婦ロボットのアンジェラに「ビール」と言い放ち、もうと左手で飲みながら、「今、さっき帰ってきたんだって？」とラベンダーブルーの瞳を向けた。こころなしか、少し、機嫌が悪そうだ。

「うん。ブラックは庭にいて忙しそうだったから、声かけなかった。ごめんなさい」

「それはいいが、、。別のことで話がある。退学ぎりぎりのところまでいったって、さっき、Z訓練校から成績表と一緒に連絡が送られてきた。内容は聞いたが、、。やってくれたな、おまえ」と苦渋の貌だ。

今日から、夏期休暇中のシルバーは、毎日のようにブラックと顔を合わせる時間が長くなる。親子とも兄弟とも友人とも違う、微妙な関係の二人だった。

「戦闘訓練で、味方側の武器庫とエネルギー基地をすべて破壊したそうだな。おまけに敵は1機も攻撃してない」

「うん。0点だって。ごめんなさい。シミュレーション基地ぶっ壊したから、あとで請求書ここに来るって。先生が言ってた」

「授業だけはきちんと受けろといっただろう。真面目に勉強しろ」

「軍隊はいやだ。人殺したくないもん」

「学校は行きなさい。実験体の天使族で唯一許されるのは、火星の軍直属のエスパー訓練校だけだ」

「なんで学校いかなきゃならないの？」

「人並みの教育と社会生活を身につけてほしいからだ。せっかく特待に推薦編入できたのに、それを使わないともったいないだろう？」

「お金の問題？」

「バカ。金なんていざとなったら親父に頼めばいくらでもなんとかなる」

「でも勘当されてるんじゃない」

「そういうこと言ってるんじゃない。おまえの立場を考えてのことだ」

ブラックはぐいとビールを飲み干すと、やれやれと右手で頭をかかえる。

「立場？」

「おまえ、俺が明日、ぶっ倒れたら困るだろう？」

「レオンがいる。アンジェラもいるし」

「あの2人は、親父のもちものだ。俺らは借りてるだけなんだぞ。最低限、ひとり立ちさせるために、一通りの教育と社会生活、この2つは必須なんだ。生きてくためにはな」

「軍隊には行きたくないよ。Zでも戦闘モードテスト不合格だったら、調査局とか事務の方に回してくれるっていうし。先月の木星鎮圧した軍隊は最悪の人殺しって、学内でもうわさ流れてるよ」

「おまえはいつでも自分の都合のいいように考える」

「えっ？」

「卒業後の進路は、そのときにならないとわからん。先のことは今かんがえるな。それに、木星鎮圧軍は、人でなしの人殺し軍団じゃない。一面だけ見て判断するな」

「はい」

「わかったか。じゃ、食べなさい。ビーフシチューが冷めないうちに」

メイド服姿のロボット少女アンジェラの作った手料理は抜群においしい。

夕刻時の夕映えが、窓の向こう側に広がる。周りは住宅地ではないため、西側の人工の太陽が沈む様子もリビングから、そのまま見ることが出来る。

北欧の景色そのままに美しい山脈が広がる。

冥王星出身の太陽系連合主席が、この惑星の首都を設定し、人工ドーム都市を創造させた。山脈側は、冬、豪雪地帯になるがこの辺はそうでもないが、景色の美しさに反比例したかのように冬の寒さが厳しいため、好き好んで住む人間は、そう、いない。

「ねえ、なぜ、僕を拾ったの？」

銀色の髪はいつのまにか伸びきって肩につくまでになっていた。透き通るように白い頬に、オレンジとバーミリオンの夕闇が、色濃く染めていた。緑色の瞳の奥は無邪気で曇りひとつ感じられない。

「拾ったわけじゃない。出会っただけだ」

「出会った？」

「うん。偶然にな」

ブラックは艶のある前髪を少し照れたように左手で振り払うと、黙々とサラダとシチューを食べ続けた。

了

年表

西暦

3000年 ロック・ハイト誕生

3020年 朝霞野夜誕生

3030年 ヒューマノイド（人間と同様の皮膚のサイボーグ）開発成功

3046年 レオン製造。地球連邦軍に配属。

3055年2月14日 ブラック・ハイト誕生

3056年 地球連邦は極秘実験で、遺伝子操作により天使族を創造。

恒星間宇宙飛行の開発。地球―冥王星間のワープが可能となる。

レオン（10年）。ハイト家の執事となる。朝霞野夜博士（36歳）

、ロック・ハイト（56歳）と離縁し、金星の研究所に地球から移住する際、航行中、宇宙船同士の衝突のため事故死。サイボーグとしてよみがえる。

3066年 ロック・ハイト（66歳）木星の反乱を制圧。その際の戦いで頭部を失い、サイボーグとしてよみがえる

3066年8月7日 デイーン・レイク誕生

3069年 ロック・ハイト太陽系連邦を設立。主席となる。

3069年 ブラック（14歳）太陽系連邦軍に入隊

3070年6月7日 シルバー・アーク誕生

3070年11月3日 バラード・レイン誕生

3077年 レッド・アーク博士、アルファケンタウリで消息を絶つ
シルバー（7歳）、ハイト家の養子となる

3083年 ロック・ハイト主席、太陽系連合設立 ブラック（28歳）、軍から太陽系連合調査局に移動。

3086年 シルバー（16歳）、ブラック（31歳）と婚約

海王星付近に空間の歪み生じ、宇宙船が数隻消息不明となる

調査局の極秘メンバー5人が調査し解決

3087年6月 シルバー（17歳）、ブラック（32歳）と結婚
レオン（41年）は辞職しハイト家から再び31年ぶりに太陽系連合軍配属となる

3088年12月～3089年1月 土星のアンドロイド製造会社製のアンドロイドバーミリオンの欠陥品が、反乱を起こす。

翌年1月太陽系連合軍が鎮圧。

3240年 地球連合軍（地球の人間たち）が反乱、暴動後、戦争勃発

3255年3月 朝霞蓮、遼、地球連合軍にサイボーグ化される

3256年6月 朝霞蓮、遼、2011年地球、日本に派遣される

3257年12月 サイボーグと人間、太陽系連合軍と地球連合軍の戦争終結 サイボーグ側の勝利となる

設定

シルバー・アーク

3070・6・7

はじめてこの作品を書いていた頃、SILVER・ARKⅡ銀河船という意味で設定した。実験体の両性体である天使族のエスパー。火星のエスパー訓練所に通うサイコブラスター。ブラックの恋人。（婚約中の天使族シルバーは、女性になり、結婚してシルビアと改名し、ブラック・ハイトの妻となる。）

髪型…セミロング

髪の色…プラチナブロンド

顔の特徴…エメラルドグリーンのかなな瞳、色白。美少年風少女天使風。

身長…165cm

体格…スレンダーだがグラマー

服装…カジュアル、訓練所学生服。スーツ。ドレス。

その他…美少年風の美少女。双子座。

ブラック・ハイト

3055・2・14

はじめてこの作品を書いていた頃、BLACK・HEIGHTⅡ高貴な黒という意味で設定した。エスパーテレパシスト&エンバス。3083年地球連邦から太陽系連合に変わった。それまでは連邦軍に所属し、大佐として活躍。おもに反乱軍の鎮圧。連邦軍の黒豹の異名をとっていたが、突然、3年前（3083年）辞職し、調査局に移動する。

シルバー（シルビア）の夫。冥王星出身。サウスポー。ポーカーフェイス。照れ笑い。

髪型…前髪が長めの少し長髪っぽい感じ

髪の色…漆黒

髪型…肩にかかるくらい。前髪は少し長い。

髪の色…漆黒。艶があり、サラサラの感じ。

顔の特徴…端正なクールビューティー。シャープな感じ。

健康的な小麦色の肌。切れ長の青紫色の双眸。

身長…185cm

体格…もと軍人のスポーツマン体格

服装…ダークスーツ

その他…水瓶座

レオン（レオンハルト）

3046年製造。金髪、琥珀色の目、肌白。現在は太陽系連合軍で極秘任務中だが、過去にハイト家の秘書兼執事だった。兼護衛用の軍事兵器としても使われている種類のサイボーグ犬。脳はドーベルマン犬だと思われるが、実は人間のものであった（瑠璃色の宇宙1参照）。普段は美青年だが、黒い金の鬘を持つドーベルマンに变身する。外見年齢25歳（実年齢40歳+？）静かな含み笑い。感情が表に現れない。

髪型…腰まで長い

髪の色…金色

顔の特徴…眉目秀麗。容姿端麗。

身長…180cm

体格…軍人なのでスポーツマン体格

服装…ワインレッドのスーツか軍服。たまにメイド服。

バラード・レイン

3070、9・3

空色の髪とセルリアンブルーの瞳 天使族のエスパー。シルバーの親友。

髪型…腰まで長い髪

髪の色…青

顔の特徴…アーモンド型の青い目、教会の聖堂に描かれた天使のような美少年

身長…175cm

体格…スリム

服装…カジュアル、またはパンク

その他…乙女座

ルビー

レオンハルトの恋人。白いスピッツのサイボーグ犬にも変身できる、靈感能力を持つ美少女エスパー。製造されてから17年のサイボーグ。

髪型…やわらかめのウェーブのかかった長い髪

髪の色…薔薇色

顔の特徴…顔かたちは、シルビアと瓜二つだが、目の色はワインレッド。

身長…165cm

体格…スリムだけどグラマー

服装…フェミニン

ディーン・レイク

3066・8・7

パブハウス「火星・紅」の業員だが、実は、太陽系秘密機構調査局

A S T E R O I D B E L T ・ Z E R O のエスパ―。バラードの保護者の立場を装っているが、実は魅かれている。包容力のあるタイプ。髪型…襟足くらいの長さ
髪の色…茶
顔の特徴…普通。やさしそう。
身長…185cm
体格…がっちり型
服装…バーテンダー
その他獅子座

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8268y/>

空の記憶

2011年11月24日18時52分発行